

まさか、熊本で

濱田義正

「まさか、熊本で」。聞く人によれば熊本は少しのぼせているのではないかと思われる方も居られるでしょう。

しかし、いつ、何処で、この大きな事件が起こるか解りませんよという意味でこの論題を付けさせて頂きました。

平成二十八年四月十四日、午後九時二六分。震度七。俗に前震というくだらぬ名称が付けられた地震であります。

ちようど台所の冷蔵庫の前に立っていました。「ドーン」と地の底から突き上げるような鈍い音と共に身体が一〇センチメートル程浮き上がり、冷蔵庫のドアに押され前のテーブルに倒れようとした時に逆に引つ張られました。レンジとトースターが約二メートル程前方に飛んで行き、前にあります幅二七〇センチメートルの水屋の六枚の戸が一度に開き中の食器類が一度に落ち始めました。それがまるで動画をスローモーションで見ることが如くにお皿が一枚、一枚、グラス、碗類が一つずつ落ちていきました。走り寄り自分の手で受けることが今にも出来そうな情景でした。

何と表現していいのか判らない鈍い音の中に、家がきしみ大きく左右に揺れるのを身体に感じながら、一瞬何が起きたのか理解出来ませんでした。そしてどうやって外に出たのか逃げたのか記憶にありません。これまで経験したことのない大きな地震、大変な事が起きたのだと気づいたのは参道に座り込んでいたときでした。

二二時〇七分に六弱、二二時三八分五弱、十五日〇時〇三分六強、一時五三分五弱、揺れはずっと続いております。十五日だけで二二四回の余震がありました。一睡もしないまま朝を迎えました。家に入ると無残な状況です。本堂に入りました。三宝尊・四菩薩・四天王皆倒れ、破損。高さ一一〇センチメートルの立像のお釈迦様も倒れ大きな大き

な傷を負われました。涙が止まりませんでした。

修理出来るものは直ぐにもやる。やったことが翌日にはもっと大きな惨事となってしまいました。寝る場所だけを確保し余震の中、地震は一応終わったと思っていました。十二時過ぎに布団に入り、十六日一時二五分「震度七強」が再び襲ってきました。カケヤで背中を思いつ切り打たれたくらい身体が浮き上がりました。

「うそ、まさか」と思いました。布団の両端を掴もうとしても身体はまるでトランポリンの上です。何度も何度も跳ね上がりました。どのくらい揺れが続いていたでしょうか。一〇分？二〇分？いやもっと。少し揺れが収まってきたときに長男の「逃げて」と叫ぶ声を聞き、その後の記憶が又、飛んでしまいました。

一時四四分五弱、一時四六分六弱、三時〇三分五強、三時五五分六強、七時一分五弱、九時四八分六弱、一六時〇二分五弱。これはあくまでも震度五以上の地震です。この十六日だけで一、二二三回の余震がありました。一時間に約五一回、十分間に八、五回です。常に揺れてる状態です。朝、家の中に入ると足の踏み場もありません。本堂の惨状にはあせんとしました。前日に修理しました仏像・仏具はことごとく粉砕していました。

十七日三六五回の余震。十八日二〇時四二分五強、二三四回の余震。十九日一七時五二分五強、二〇時四七分五弱。これ以後、震度五以上はおきていません。

五月一日までで 震度七——二回

六——五回

五——一七回

四——一七回

三——四一〇回

二——一、一六九回

被害程度の分け方、それはその後の見舞金の分配方法にも生きてきました。被害のなかったご寺院五名の方々を選び、それぞれが別々の日に一人にスタッフ一人着きこの被害のお寺がどの寺なのかも一切判らない。その人の感性でAの寺は被害四、Fの寺は被害二という分け方をして頂き五名の方の全てが終ると今度はスタッフ全員で五名の方の査定を元にAの寺の被害ランクを決めるわけです。それが終わって始めてAの寺は〇〇寺、Bの寺は〇〇寺と証します。最後の査定が終わるまでその寺の正体は判りません。私の寺がどこのランクに入っているのか、私が判らないのであります。各ご寺院様も文句一つ言われない。ただただ宗務所の動きに着いて来ていただきました。そして納得していただきました。

この熊本大震災で多くのことを学びました。未だお会いしたこともない方々からのお見舞い、激励のお電話、お手紙。

リュックサック一杯の支援物資を背負って自ら熊本まで足を運んで頂いた関東のご寺院様。人との縁、つながり、そして人の情けを教えて頂きました。有り難うございました。心から感謝、お礼申し上げます。本当に有り難うございました。

熊本への復旧・復興はようやく一歩動き始めたばかりであります。どれだけかかるか判りません。しかしながら皆、前向きであります。頑張っています。

このお時間を頂きましたことも重ねてお礼申し上げます。有り難うございました。